
真相など存在しない

音時 修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真相など存在しない

【Nコード】

N4283T

【作者名】

音時 修

【あらすじ】

生き甲斐と記憶を同時に失った少年・藤宮恭一は、自殺を決意する。自分の人生を悲観した恭一はためらいなく自動車に轢かれ、世界から切り離されるようにして死んだかのように思ったが、【生後の世界】にて再び起き上がる。生前で絶望し、死後に希望を求めた少年が同じような境遇を辿る者たちと一緒に少数で暮らしはじめ、能力という異質な力を持つ仲間たちの中で唯一能力を持てなかった最弱主人公が生き甲斐を見つけようとする、友情あり、笑いあり、恋愛ありの異世界ファンタジー！

第一話 死ねば楽になる（前書き）

素人が書いた小説です。

初心者といっても過言ではないので、よろしくお願いします。

第一話 死ねば楽になる

「さあて、死ぬか！」

7月、少し早い夏の訪れと共に少年・藤宮恭一は高らかに自殺を決意する。

爽やかな声は前向きな面影を晒し出すが、言っていることは完全に後ろ向きだった。

今年の冬、スキー場の立ち入り禁止区域で雪の中に埋まっているところを救出され、病院に搬送されたが、その時、既に彼は記憶を失っていた。

思い出せることは、とても大切な生き甲斐を失ったという絶望的なことだけで、そんな彼が自殺したと思った主な理由としては、

『何てこった、僕たちの息子が記憶喪失になるとは…ママ、何とかならないかい？』

『やーね、パパ、それはお医者さんに言うことでしょうっ。』

『あはは！ こいつは一本取られたなあ！』

などと、絶望している息子の目の前で寒すぎる会話を繰り広げている両親が嫌だったということもあるが、一番の理由としては失った生き甲斐、大切な友達の顔や、ついでに両親のことすら忘れていく自分に嫌気がさしてしまったということ。

記憶喪失になった翌日から、彼の世界は変わった。

外を歩けば知人からは同情の眼で見られ、学校の中に入れば、友達や先生からの必死なアピール。家の中に居ても楽しい雰囲気無理に作り出そうとする両親。

そんな人生が嫌だったということもあり、彼は今、交差点の前に

いる。

轆かれたら一環の終わり、そんな状況が思い浮かぶほど早い車が行き来している。通行人が青になるのを待っている中、気にせず赤で突っ走る恭一、周囲からの悲鳴など、彼には届かない。接近して来る軽トラが必死にブレーキをかけるが、もう間に合わない。

俺は今から自由になる！

ささやかな希望を持ち、絶望的な状況の中で、残された者たちのことなど一切考えずに飛び出した。

次の瞬間、轟音と共に恭一の身体が一瞬だけ宙を舞い、アスファルトの上を物凄い勢いで無様に転がり、薄れる景色の中、自分から流れる血を見る暇すら与えられず、恭一の意識は、この世界と切り離されるように閉じた。

後悔、などない。

そう思いながら、彼の人生は幕を閉じるかのように思えた。

第二話 生前と死後の間

目を覚ます。仰向けに転がっていた恭一が最初に見た光景は青空だった。

雲はないが、太陽もない、そんな活気のない青空を見て彼は起き上がった。

「……死ねなかったのか、俺」

それにしても野次馬の一人もいないと、周囲を見渡してみるが、野次馬どころか建物の一つですらも存在しておらず、風の音が鮮明に聞こえるほど静かだった。

立ち上がり、注意深く確認しても何も無い、広がるのは何も無い世界。

「あれ…やっぱり死ねたのか、だとすれば、ここは死後の世界ってやつか…？」

返答もない独り言を呟き、冗談混じりに笑う恭一が歩こうとした瞬間。

藤宮、恭一様

ふと、恭一の背後から女性の声がした。

聞こえると同時に、その場から飛び退き、態勢を整えて背後を振り向いた。

楽しそうに小さく笑う小柄な少女、メイドの姿をした女性が恭一に言った。

「ふふ、声が聞こえてから避けているようでは、遅いと思いますよ」
誰にでも分かりそうな一般論を言うメイドは、短い茶髪を整えるようにして、緊張した身体を休ませる恭一を見ながら言った。

「ようこそ、ここは、死ねなかつた者たちの世界、我々一同は恭一様を歓迎します」

当たり前のように言うメイドを見て、恭一は啞然としながら頭の中を整理した。

まず、最初に確かめたいことは、この世界が死後の世界ではないということ。

恭一は軽トラに轢かれ、元の世界で意識を失ったはず。つまり、ここが死後の世界とやらならば、即座に信じてもいいし、むしろ信じたい。しかし、メイドが言うことによると、ここは死ねなかつた者たちという世界であるということから、自分はまだ死んでいないらしい。ただし、生前の世界とは何かが違うというのは明らかである。

もう一つは、何故自分の名前を知っているのか。

こんな綺麗なメイドさんと会ったことは愚か、様をつけられるような覚えなども一切ない。というか、それ以前に記憶を失っている恭一が両親の姿ですらも覚えていない状態でメイドさんの姿を覚えているはずがあるうがない。いや、これぐらい綺麗な女性ならば覚えていたかもしれないという男の子っぽい感情は当然恭一にもあるわけだが。

二つの事柄を整理していると、メイドの方から話しかけてきた。

「あの、どうかなさいましたか？」

「…いや、どうして、死ねなかつた者たちの世界って分かる？ た

とえ、ここがそういう世界だったとしても、俺たちが、生前の世界…みたいな、前の世界で死んでいないということが分かるわけじゃないだろ？ 大体、死んでないなら、何でここにいる？」

質問の連射をするようにズバズバという恭一の言うことを、全て頷きながら聞き続けるメイド、恭一の言葉が出尽くしたことを悟ると、口元を緩め、幼さの残る可愛らしい笑顔で返答する。

「この世界は、恭一様の言う生前の世界で意識を失った者たちだけが来られる世界です。現に、この世界には現代で言う、コールドスリープなる技術の欠点を完全に克服した上で、やってきている人もいるのですから」

恭一が拳を口元に当てて考え始める。

コールドスリープ。恭一が知っていることと言えば、長期間の間、肉体を冷凍保存して惑星間の移動などにおいて、食料や酸素などの生命維持を目的とした技術。漫画の世界などでは、主に現代では治らない病を未来に託すための手段として使われることもあるが、それが実際可能かどうかまでは、恭一には分からない。しかし、それが不可能だということも恭一に確認できるものではない。

恭一が口元から拳を離す。

「さつきから気になってたんだけどさ…なんで、俺の名前知ってるんだ？ 名乗った覚えはないんだけど」

恭一の言葉に対して、意表をつかれたかのように優しい表情を崩し、驚愕の表情に変わるメイド。少しのあいだ、沈黙が続くが、メイドは恭一の背中に回りこみ、何かを？がすようにして、恭一の背中から、ピリッ、という音を立てて？がした紙を見せる。

「もしかして、お気づきではなかったのでしょうか…？」

？がされた紙をまじまじと見つめる恭一。

内容を見た途端に、怒りか恥ずかしさか分からない勢いで顔が紅潮する。

【藤宮恭一。記憶を失って1年目の新人です。もしも、外に出ていたら、下に書いてある病院まで連れ戻して下さい。】

その文章の下には住所、病院名、挙句に両親の名前、あらゆることが記載されていた。それだけなら恭一にとっては、まだ我慢できたが、それ等を超越した文章が、PSと記載された文章の後に書いてあったことに、思わず恭一は絶叫した。

「な、なんだこりゃあああああああ！？」

僕の息子は可愛い、私の息子は可愛い等、親バカもドン引きする愛の文章が、怪奇文章のように込められていた、驚いたまま数秒固まった恭一は、数秒後に、音にも負けない速さ、そして満面の笑顔で紙をぐしゃぐしゃにした後、一気に引き裂き土の中に必死に埋めるようにして、紙の存在を丸ごと隠滅しようとする。その姿を見て、メイドが楽しそうに笑っている姿を見てしまった恭一は、コホンと、咳払いをしてメイドの方を落ち着いて振り向いた。

「さて…今までのごちゃごちゃはいいとして、本題に入りますが…」

真面目な顔つきをして、凛々しい姿勢から一気に、

「今までのことは決して口外しないで下さい…」

地面に頭をこすりつけて土下座しながら必死に請う恭一。
メイドの笑顔が若干引きつって苦笑になりながらも、コクコク頷く。

「あの、恭一様…承知いたしましたので、頭をお上げになさって下さい」

メイドの言葉に、救われたようにして頭を上げる恭一。

「本当にありがとうございました…っと、そっぴや」

何かを思い出すようにして、メイドに話しかける。

「最初、出迎えてくれた時、我々って言ってましたけど…他にもいるんですか？」

「はい、私は本来、案内役としてここまで連れて来られましたので」

先ほどまでの引きつった顔は面影すらない、メイドは服装を整え直し、手を引き、恭一を案内した。

第三話 利用し合うか助け合うか

しばらく歩くと、案内された先にあつたのは、野戦を行っている最中のようなキャンプ場、テントの前で折りたたみ式テーブルを中心に座っていた4つの人影が見える。

まるで家族のような4人組、老人、中年、中高生、小学生くらいの4人家族、しかし、全員の顔を見ても、誰一人ですら遺伝子が繋がっているとは思えない。

「あら、来たみたいよ」

顔が見えるかどうかの距離で、恭一の方にまで聞こえる声で、一人の少女が座りながら指を差した。

とまどう恭一の腕をがっしり掴んで、メイドが上目遣いで見る。

「逃げないで、下さいね」

「え…そんな逃げるくらい危ない何かが起こるんですか、それは、ご勘弁…つて、ちょっと！　なんで腕を引く力がそんなに強くなるんですか!?!」

恭一の言葉を無視したまま、そのまま物凄い勢いで座っていた人達の目の前まで連れてこられた恭一を見て、少女が疑問に顔を歪ませている。

「なんで青ざめて…具合でも悪いの、あんた？」

青ざめるようなことをしようとしている人は誰ですか、と小さく呟き、なるべく目の前の少女から視線を逸らし、青空を見て想う。

「（なんでだよ、この世界にきて数分で修羅場って、どういうことだよ…女の子二人に、こんなことされるような覚えはありませんし、あつたとしても俺には記憶がないんだ、だから、見逃してくれ、見逃して下さい、見逃すようお願いしてもいいですか！？）」

バカみたいな思考を張り巡らしていると、不安そうな顔をしている恭一に少女がメイドの方を見る。

「サクラさん、こいつに不安がらせるようなこと言いましたか？」

「いえ、まったく」

「言ったよな！？ 確実に言いましたよね！」

咄嗟にツツコミを入れ、メイドの方を見る。

スツと手を離してクスクス笑うメイドを見て、やれやれと言いたげな顔で少女が恭一に謝るようにして頭を下げる。

「悪いわね、サクラさん…もとい、このメイドさんはメイドとしては最高のスキルを持っていると言っても過言じゃないけど、ちょっと悪戯心があるのよね」

悪戯心のあるメイドはメイドとして最高級なのかと、少女の方にもツツコミ became たが、余計なことを考えないように、まずは聞きたいことから聞き始めようと自己完結する。心の動揺を解放するようにして、落ち着きを取り戻した恭一は平然とした表情で、

「この世界については、さっきメイドさんに聞いた…でも、とてもじゃねえが信じられねえ…本当に俺は死んでないのか、ここから生

前の世界に帰れるのか？」

「信じようが信じまいが、それは自由。ここが生前と死後の間…まあ、生後か死前の世界とでも言うべきなのか、少なくとも、この世界にいる以上、誰も戻れた人なんていない…そう、問題は这个世界で、あなたが何を求めるか」

「何を求めるか…？」

何のことかまったく分からずに、恭一はバカみたいな顔で少女を見る。

「そう、死ぬか生きるか…死ぬなら何処かに消えるといいわ、実際死ぬ方法を探しに出かけた人も見ているから、生きるなら私達と一緒に暮らさない、この世界ではお互いがお互いの能力、この世界で得た力を利用し合うことが重要な」

この世界で得た力、利用し合う。二つの単語が強烈に意識に残る。前者の方は後々聞いてみるとして、後者の方が重要だ。《助け合う》ではなく《利用し合う》と少女は言った。これはつまり、必要な信頼関係があるかどうかに関わる。たださえ存在が不安定な世界に召還されて、とまどっているのに対して、少女はためらいもなく言ってきた。これは試されているのか、それともこの世界に信頼などという概念は存在しないのか…。

恭一は少しだけ考えた後、

「分かった、偶然拾った二度目の人生だ…お互い、助け合おうぜ」

そう言って少女に手を差し出す。

利用し合う。そんな言葉を使うのは間違っている。それは恭一が

記憶を失った間の1年間の人生で学んできたことだ。確かに自分は生前の世界に嫌気がさして、自殺したが、それでも友人や両親は助けようと頑張ってくれていた。利用、などされていると分かれば、もう既にこの世界に来ていたかもしれないし、あるいは、死んでいたかもしれない。自分を信じて、助け合おうぜ、と言ってやった。少女が微笑して手を差し出し、二人の手が交差して握手が交わされる。

「私は赤江悠里、生前では15歳だったけど、あんたは？」

「俺は藤宮恭一、一応、17歳だ」

そう言った後、二人の手が互いの意志によって離される。

「年上かあ…とりあえず、恭一って呼ぶね」

いきなり呼び捨て、かつ名前前で年上を呼ぶのも珍しいなとか思いつつ頷いておいた。

少女は自分の前髪を邪魔そうにして見た後、その美しい茶髪を左右に避けて話し始めた。

「他の人は後で自分から聞きに行って、まず、ここで得た能力について説明しないとイケないわね」

そう言い、彼女はこの世界で得た能力について話を始めたのだった。

第四話 恵まれない力

少女の口から語られる事柄を、耳にする前に少年は既に理解していた。

『能力』、男の子なら誰でも一度は夢見る力だろう。アニメやマンガなどに使われる異質な力。手に入れられれば、それだけで特別な存在になれる。特別な力を手に入れることができる。しかし、それはあくまでファンタジーな世界での話、そんな世界とは一切無縁だった藤宮恭一が、まさか現実には絶対に信じられないような世界、いわゆるファンタジーの世界で、その力を持つ可能性が秘められているとすれば、当然期待しないわけがない。

しかし、少年の幻想は一瞬で打ち砕かれた。

「あれ、恭一から力を感じない…」

は？ と間の抜けた声で返事をする恭一。

悠里の口から出た、その一言に絶句する。

「もしかして…無能力？」

そう、恭一には力がなかった。

「信じられない、あなた…もしかして、この世界に来る前に何も後悔しなかったの…？」

確かに、後悔などしなかった。

そうでなければ自殺などしない、するわけない。しかし、それが少年が唯一ファンタジーな世界で唯一持てるはずの希望を打ち砕い

てしまうとは夢にも思わなかった。

「この世界では、生前の世界で死ぬ前の思念を元にして能力が構成されるのよ。だけど…」

微塵も後悔しなかった恭一には、能力なんてあるわけがない…と
いうことになる。

「う、嘘だろお!？」

本当よ。と言いつつ悠里が失笑と哀れみの視線を向けてきた時、
悠里の後ろから豪快な笑い声が聞こえてきた。確認してみると、バ
カ笑いをしている老人が恭一の方まで腹を抱えながら立ち、寄っ
てきた。

「ぷっ…異質も異質、こんなファンタジーな世界でもリアリティを
追求するとは…ぷっ！」

そう言い、恭一から顔を隠すようにして口元を両手で抑えながら
笑い続ける老人を見て、メイドの姿をしている少女も、悠里も抑え
きれない笑いを表情に出して笑う。

「……………やっぱ、死にます」

そう言いながら恭一が、その場を後にしようとする後ろに振り返って
何も無い大地に向かって歩こうとする。メイドが、逃げようとする
恭一の腕を再び両腕で抱きかかえるようにしてつかむ。

「あはは！ 恭一様、大丈夫ですよ、能力があるといっても、あつ
ても無駄みたいな人もいますから」

「そ、そうよ！ 私の能力なんて、『微細な音を聞き取る』っていう能力なのよ！ って、誰が無駄な能力だあー！」

自分で言ったんじゃないですかーと、笑いながら追っかけてくる悠里を軽やかなステップでメイドらしさを出しながら、逃げるようにして追っかけまわる。まるで、小学生の戯れのように駆け回る二人を見て、

「っ…！」

思わず笑いがこぼれおちるようにして、恭一もその光景を見て小さく笑ってしまった。

少年の笑いに連動するようにして、老人も微笑する。

「楽しいだろう、この世界は…ワシの年齢ともなると、孫の年齢程度だから、なおさらだな」

そう言い、老人は恭一に視線を向けると、

「ワシは戸崎小次郎、ちょっとだけ、君のイメージする老人と違いかもしれんが、よろしくな」

再び追いかけて回る少女たちの方に視線を戻した。

活気のない青空の中、走り回る二人を見て、恭一は1つの安堵感を覚えた。

「（こんな景色がいつまでも続けば…俺も、この世界で楽しく過ごせるかもな…）」

不安定な異世界で、少ない仲間たちと暮らすことに期待を覚えた少年はこれから

こんな世界が、夢から現実に変わる瞬間を知ることになるのは、もう少しの時を必要とする

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4283t/>

真相など存在しない

2011年10月9日03時50分発行